

昼過ぎ。

直射日光が容赦なく照りつける公園で、私はベンチに座っていた。

運動不足解消にとウォーキングを始めて三十分を過ぎた頃。

なんの予防せずにふらっと歩きに来てしまったせいで、元よりろくに運動しない私の体は悲鳴を上げたみたいだ。

日陰のベンチまで辿り着けず、私は太陽の光を手で遮りながらこの後の行動を考えていた。

——ふと、視界に影が。

「ちょっと、大丈夫？」

見上げたら、逆光の中に人が立っていた。
三人いる。

影になっていても分かる。

全員背が高く、胸板は分厚く、肩幅も広い。半袖の袖口はパツパツに引き伸ばされ、そこから伸びる腕には血管が浮いている。

その筋肉が私の視界を埋め尽くした。

別の意味でクラクラする。

「顔色悪いな、熱中症になっちゃった？」

初めに聞こえた声と同じ声だ。

三人の中で一番背が高い人。三十代くらいだろうか。落ち着いた声で、こちらに気を遣ってくれているのが分かる。

「少し、体調が悪くなってしまって」

私がなんとか答えると、彼は二人を振り返った。

「水、持ってる？」

「俺持ってます！」

勢いよく前に出てきたのは三人の中では一番若そうな男性だ。私よりも歳下かもしれない。

彼は持っていたバッグからスポーツドリンクを取り出

して、「はいどうぞ！」と眩しい笑顔で差し出してきた。

「ありがとうございます…」

受け取って一口飲むと、体に分かりやすく染み込んでいった。

「お、ちょっとスツキリしたかな？ でもここじゃ日差しキツイっしょ」

そう言いながら三人目が私の頭上でタオルを広げた。私に影を作ってくれている。

金髪の彼を見上げると毛先が透けてとても綺麗だった。丁寧の手入れしている髪に違いない。

「あ、そうだ、オレンち行く？ 公園の裏のマンションだしすぐだよ。エアコンガンガンかけて涼んでいきなよ」

その彼が弾むような声で言った。

「え、でも」

「遠慮しなくていいって、このまま放っておくわけにもいかないしさ」

「俺たちも行くよ、心配だし」

「オレも行きます！」

そんなに重症ではなかったのだけれど、断れない空気になってしまった。

なんなら眩しい目の前の筋肉たちに、私は少し浮かれていたのかもしれない。

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

立ち上がろうとしたとき、足元がふらついて。

次の瞬間、体が浮いた。

「っ、え」

「無理すんなって」

金髪の男性が当然のように私を抱き上げた。

お姫様抱っこ、だった。

そのまま歩き出す彼と、私をパタパタと持っていたタオルで仰ぎながらついてくる二人。

現実感のないこの状況に、私の心臓は高鳴っていた。

金髪の彼に抱き上げられたまま公園を歩く。

体調が悪くてぼんやりしていたはずなのに、私の意識は別のところで忙しかった。

だって私は、筋肉が好きだから。

いわゆる筋肉フェチだ。

鍛えられた肩や腕を見ると、つい目で追ってしまうくらい。

「翔平（しょうへい）、疲れたら変わるぞ」

横から歳上の男性が声をかけた。

「余裕っすよ、哲也（てつや）さん、何言ってんすか」

反対側から歳下の男性も。

「翔平さん、本当に大丈夫ですか？ 俺も代われますよ！」

「健（けん）、お前までなに？ もしかして羨ましいの？」

「ち、違いますよ！！」

（哲也さん、翔平さん、健くん……）

頭の中で、そっと彼らの名前を反芻した。

——翔平さんの部屋で三十分ほど休むと、体調はすっかり回復した。

涼しい室内に、それから経口補水液と保冷剤までいただいてしまった。

「本当にありがとうございました。もう大丈夫そうです」

私が頭を下げると、三人は安堵したように笑った。

「よかったあ！ 安心しました！」

「無理に家まで送っていくよりこっちが正解だったみたいだな」

「うん、顔色も良くなってきたね」

一人暮らしとは思えないほど広いリビングのソファに座らせてもらって。

哲也さんは私の左、翔平さんは右、健くんはなぜか私の前で床に座り込んでいた。

そんな健くんが体を揺らしながら口を開いた。

「お姉さんも体動かしに来てたんですか？」

見上げる純粋な目に苦笑する。

「そうなんです、運動不足なので…。でも急に何十分も動いちゃだめですね」

「そうだな、あの公園はあんまり日陰がないから」

「オレたちも休憩するときはいつも日陰のベンチ探すしね～」

「いつも」という言葉に耳が反応した。

どうも三人は顔見知りらしいし、いつもあの公園でトレーニングしているのだろうか。

ということは、これからこの公園に通えば、この筋肉が拝める…？

黙ってしまった私を健くんが覗き込んできた。

「…？ どうしかしたんですか？」

言おうかどうか一瞬迷ったけれど、少しでも仲良くなれるきっかけになればと、私は口を開いた。

「笑わないでくださいね…。私、筋肉が好きなんです」

横の二人が私の顔を見たのが視界に入った。もちろん健くんも。

視線が集中して、一気に顔が熱くなる。

でも続けた。

「詳しいほどではないんですけど…、ちょっとしたフェチと言いますか。目が行ってしまうんですね……」

「へえ……」

「……」

沈黙。

さすがに気持ち悪かったか。

私が何か話すべきか、それとも彼らの言葉を待つべきか…、ぐるぐる思考を巡らせた。

その俯いた私の上で、三人が視線を合わせているのも気付かずに。

「……じゃあ、触ってみるか？」

切り出したのは哲也さんだ。

「さ、さわ？」

「筋肉好きなんだろ？」

「それいいね！ちゃんとナマの筋肉触らせてあげる

♡」

「え！？」

翔平さんが楽しそうにそう言って、一気にTシャツを捲り上げた。

白いTシャツから露わになった腹筋、胸筋が順に部屋の照明に反射される。

「ほらほら♡ 哲也さんとオレとで…♡」

上半身が裸になった翔平さんは私の体を哲也さんのほうに向かせると、背中から抱きついてきた。

肩を抱き込まれその腕に包まれる。背中にはぴったりと分厚い胸の感触。

驚きのあまり私が何も反応できないでいると、前から同じくTシャツを脱いだ哲也さんも近づいてきた。

腰に腕を回され、私の顔は哲也さんの胸に埋もれる。

前からも、後ろからも、筋肉……。

むちむち、ぱつぱつ、でも程よい弾力があって、温かくて。

(筋肉って、こうなんだあ……♡)

私なんか埋もれてしまいそうなくらいの体に挟まれると、なんだか安心感がある。

眉尻が下がり、とんでもなくふにゃけた顔をしていたに違いない。

覗き込んできた翔平さんが笑った。

「すごい顔してるわ♡ほんとに好きなんだねえ♡」

頭ごと腕に包まれて、大きな手のひらが髪を撫でていく。

そんなことされたら本格的に意識がとろとろになって…、ふわついてしまう…。

「どう？♡ 幸せ？♡♡」

「し、幸せです……」

筋肉に潰された頬で腑抜けた声を出すと、翔平さんは私を抱き寄せた。

哲也さんから体が離れ、翔平さんにしっかり抱き込まれる。

私の髪に頬擦りしたかと思えば、今度はすぐ耳元まで唇が近づいてきた。

「じゃあさあ、もっと感じてみたくない？」

どういう意味だろう…？

分からず翔平さんの顔を見ようとしたら、それを手伝うように手が私の頬を引き寄せ。

唇に唇が触れた。

ちゅ♡

音を立てられ、

むちゅ♡

唇を押し付けられ、

むちゅ、ちゅ♡

隙間を埋めるように角度が変わる。

その間も翔平さんの腕は、私をまるでその体に埋め込むように蠢いていた。

ちゅ♡ くち、ぬち♡

腑抜けていた私は誘われるがままに口を開いてしまった。

ぷちゅ♡、くちゅ♡

口が閉じられないよう隙間に下唇を差し込んだ翔平さんは、

れ、る……♡♡

舌を進めてきて、私の口を開かせると、
ぢゅ、る…っ♡♡ ぢゅるう♡♡
舌を追いかけてくる♡♡

「……、♡」

「……あは、お姉さんとりんとりんだ♡ かわいいね～
♡♡」

なにか、始まってしまった。
拒否しないといけないのか、それとも流されてしまっ
ていいのか。
考えないといけないのに、

「もっとキスしよ♡♡」

翔平さんの金色の髪が私の頬に降り、さっきよりも深
く唇が重なったら何も考えられなくなる…♡♡

「俺たちも触っていいか？」

「そうですよ！ 翔平さんばかりずるいです！」

「…だって、おねーさん♡ いいよね？♡♡」

私の返事を待たずに翔平さんはソファに座り直し、私
はその足の間へ座らされた♡

頬を掬われたままキスは途切れない♡♡

逃げ場のない舌が翔平さんの舌に絡め取られ、何度も
擦り合わされた♡

視界は翔平さんでいっぱい♡♡♡

「おっぱい、やわらかそうだな…♡」

横からは哲也さんの手が伸びてきた♡

優しく私の胸を覆った手が♡ ふわふわと感触を確か
めるように動いて♡♡

ときどき頂点を指で挟む♡♡

直接的な刺激に、ちりッ♡と体の中で甘い疼きが生ま
れてしまう♡♡

「俺は、こっち…♡」

私の足の前に座った健くんは私のウェアに手をかけ、
ずり下ろしてしまった♡♡

すぐさま足を両手で開き、健くんは下着の上から割れ
目を撫で♡

「ほかほか……♡ クリ、ここかな？♡」

その少し上を探るように指を滑らせた♡

ずり♡ くち、ぷちゅ♡♡ れる♡ ずり、ずり♡♡

唇にかぶりつかれ、閉じ込められた舌を舌で擦られ♡
柔らかい脂肪を揉まれながら焦らすように乳首を挟まれ♡

すり、さり♡ さりさり♡ こす、こす♡

布越しのクリトリスを、育てるように撫でられる♡♡

(なに、これえ…♡♡ 筋肉に囲まれてキスされて、乳首とクリ触られて…、こんなこと起こっていいの…！？♡♡)

「……っ♡ ふ♡ ん♡ ……、…ッ♡ ッ♡」

「声出てきたね♡ いいよ、もっと感じて♡♡ お姉さんには楽しんでもらいたいからさ♡♡」

「乳首も勃ってきたぞ♡ まだ少し刺激してるだけなのに♡」

「クリも…♡ もうはっきりと場所が分かるくらい♡主張してきてますよ♡♡」

三人の言い方は優しい、きっとひどいことなんてしない……♡♡

流されちゃっても大丈夫なはず、だ♡♡♡

「……あれ、おねーさん自分から舌出して♡♡ なに？♡ もっとべろべろしてほしい？♡♡♡」

私が微かに出した舌を、翔平さんは逃がさなかった♡
♡

また角度を変えて隙間なく唇を密着させ、「ふふ♡」
と笑いながら舌を弄んでくる♡♡

翔平さんは私の舌を口内に吸い上げた♡♡♡

吸い伸ばされた舌が少し苦しくて、でもそれが気持ち
いい♡♡

「俺もお姉さんのクリ、口でしてあげたいなー…、いい
ですね？♡♡」

健くんの太い指が下着をずらした♡

大きな体が私の太ももを肩に乗せ、こちらに進んでき
て♡

れ♡♡♡

舌がクリトリスにかぶり♡♡

れ、れ、♡♡

上下に動いた♡♡

ぞく♡ ぞく♡ ぞく♡

体の真ん中を淡い電流が下半身から胸の奥へ走っていく♡♡

れ♡ れちゅ♡ れ、れ、れ♡

「っ♡ ふ♡ …ッ♡ んあ…っ♡」

「もうぷっくりだ…♡ 皮からほんのちょっとはみ出ちゃってますよ♡♡」

次に哲也さんの声が聞こえてきた♡

「気持ちよさそうな顔してる♡ 俺もお姉さんの生乳首、触らせてほしいな♡♡」

哲也さんが私のシャツを捲りあげて♡♡

優しくスポーツブラから胸を掬い出し、先端を見て笑った♡

「服の下でもうこんなに尖ってたのか♡ 早く触ってやればよかったな♡♡」

哲也さんの手が胸全体を包んで、それから乳輪の周り

を強調させるように搾る♡♡

見えないけど分かる、中心で乳首がむくむくと勃起していく♡♡

次にしたのは湿った柔らかい感触だ♡♡

れる♡ れろお♡♡

舌だ♡♡

乳首も舌で舐められてしまった♡♡♡

「ふあ♡ あ…ツ、あ♡ あ、ん…！♡」

「お、硬くなってくぞ♡ 舌当たり最高だ♡」

れるれる♡ れろ、れる♡

れるっ、れるっ、れるっ♡♡

尖らせた舌先で上下に揺らされ♡♡

引っ張られる付け根が痺れる♡♡

翔平さんは私の体を閉じ込める腕に更に力を込めてきた♡♡♡

ぢゅ♡ ちゅ♡ ぢゅぷ♡♡ ぢゅり、ぢゅり♡

食べてしまいそうなくらい翔平さんは私の舌を口内で

遊び♡

れろっ♡ れ、れ、れ♡♡ れろお♡♡ れろお…♡

♡

健くんは舌を押し上げるクリトリスを腹で擦り続ける

♡♡

れろんっ♡ れろんっ♡ れろれろれろっ♡♡ …べ

ろんっ♡♡

哲也さんは乳輪を揉みながら突き出た乳首を舌先で強く弾き♡♡

「……ッ♡ ン♡ ……あ♡♡ ん、んう♡♡ ……ン、
ん…ッ♡♡」

動けない体に気持ちいい感覚が溜まっていく♡

健くんの肩の上で足は微かに震え、手は翔平さんの巻き付いている腕にしがみついた♡

「このままイけそうかな？♡ あ～～、目とろーんとして…♡♡」

「はッ、あ♡ あ、…っ♡」

「かわいいね～♡ イくときの声聞いてたいなあ♡♡」

「ふ、う……っ♡♡ っ、あ♡ あ…♡♡」

翔平さんの唇が頬へ移動して、首に埋もれた♡

今度はその薄い皮膚を吸っている♡♡

くすぐったい♡ 首にされるキスも、翔平さんの髪が揺れるのも♡ だけど♡

れろお♡ れろれろれろっ♡♡ れろッれろッれろっ♡♡

べろ、べろ、べろ♡♡ れろん♡♡ …べる、べる、べる、べるっ♡♡

舌で愛撫されるクリトリスと乳首が、もっと敏感になって♡

「あッ♡ あ♡ あっ♡ …だめ♡♡ …ッ♡♡ ん、ん…ッッ！♡♡」

「イきそうだね♡ イって♡イって♡」

「あ……ッ♡♡ ああっ、あ…っ！♡♡♡」

れろッれろッれろッれろッ！♡♡ れろッれろッれろッれろッ！♡♡

べるるるるるっ！♡♡ べるるるるるっ！♡♡

煽るように二人の舌の動きは一定になった♡♡♡

れろッれろッれろッれろッ！♡♡ れろッれろッれろ

ッれるッ！♡♡

べるるるるっ！♡♡ べるるるるるっ！♡♡

「あッ、ああ！♡♡ ア…ッッ！♡♡ や、イク、……
！♡♡♡♡」

れるッれるッれるッれるッ！♡♡ れるッれるッれる
ッれるッ！♡♡

べるるるるるっ！♡♡ べるるるるるっ！♡♡

れるッれるッれるッれるッ！♡♡ れるッれるッれる
ッれるッ！♡♡

べるるるるるっ！♡♡ べるるるるるっ！♡♡

「ン、んう…………っっっ！！♡♡♡♡♡♡♡♡」

「イってるイってる♡体すっごくビクビクしてる♡♡
かわい〜〜♡♡♡♡」

私の絶頂を見ても、哲也さんと健くんの二人はあやす
ように突起を愛撫したままだ♡♡

私はそれにすら反応してしまって、体がビクつくのを
止められない♡♡

(イっちゃったあ……♡♡ きつく抱きしめられて乳首もクリも一緒にされるのやばあ♡♡♡ こんな癖になる…♡♡♡)

翔平さんの胸にもたれかかって息を整えていると♡♡
♡

健くんが膝を立てた♡
ずるり、下ろしたズボンから、

ぼろん……♡♡♡♡♡♡

勃起したおちんぽが♡♡ 弾け出た♡♡♡♡

(でっか……♡♡♡♡)

たくましい体に似合う、血管の浮き出たいきり立ったおちんぽから目が離せなくなる♡♡

「俺、お姉さん見てたらもうちんぽギンギンになっちゃいました♡♡ いいですよ？ お姉さんももうちんぽ欲しいでしょう？♡」

健くんが立ち上がるとそのちんぽは更に迫力を増した



私に狙いを定めて反り返るちんぽに、私はごくりと唾を飲み込む♡

隣に移動した翔平さんと、反対側の哲也さんがそれぞれ私の足を腕に抱えて広げた♡♡

「ちんぽ受け入れてみよっかあ♡♡ オレたちめっちゃ腰振れるよ？♡♡ きっと気持ちいいと思うよ～？♡♡♡」

「そうだな、お姉さんが体験したことないセックス、体験させてやれる♡♡」

そんなこと言われても、もう今の時点で体験したことないことしてるけど…♡

広げられたおまんこがヒクついた♡♡ もう体は欲しがっている♡♡♡♡

健くんもヒクついている入り口を食い入るように見つめていた♡♡

「…いいですか、挿れても♡ いいですよね？♡♡」

「は、はい…っ」

思わず返事してしまった♡♡

健くんの顔がぱあっと輝いて♡

その表情はすぐにギラついたものに変わった♡♡

「ふー♡♡」と長く息を吐いて、両側から広げられていた私の足を更に押し広げ、腰を落としてくる♡♡♡

長いちんぽの先を調整し、陰唇を掻き分けるように左右に動かし♡♡

ぬちょ♡♡ ぬぶ……♡♡♡

先っぽが入ってきた♡

それくらいならまだ大丈夫だったのに♡♡

ぞり♡♡

「あ…ッ♡♡」

ぞり、ぞる♡♡♡

「あッ♡♡ ああアっ♡♡♡」

亀頭と、同じく太い幹が壁を撫でながらおまんこを広げていく♡♡

「キツいか？ しっかり濡らしてやらないと♡♡♡」

おちんぽだけに意識が全部持っていかれていたのに、

そう言った哲也さんがクリトリスに指を伸ばしてきた♡
♡

ちゅく♡♡

「あッッ、お、……！！♡♡♡♡♡」

「きつー……♡♡♡」

健くんも呻く♡

イったばかりのクリトリスを皮膚の硬い指で撫でられた瞬間♡♡

私のおまんこは縮こまって、健くんのおちんぽを締め上げた♡♡♡

「お、あ、だめ、だめです、それ♡ 一緒するの、だめ♡♡」

「濡らさないと余計きついぞ♡♡♡ それに気持ちいいところはいっぱいの方がいいだろ♡♡」

ちゅく、ちゅく、ぢゅくっ♡♡

哲也さんは私の愛液を掬って、ぬかるんだ指でクリトリスを撫で続けた♡♡

「お……ッ♡♡」

「クリ弱いか、あっという間にまた勃起したな♡♡」

「だめだ〜〜♡♡ 加減できない、ごめんなさい…！
♡♡♡」

ぐ、ちゅ……っっ！♡♡♡♡♡

「……、っっっ！！♡♡♡♡♡」

奥まで一気に押し込まれた健くんのおちんぽに息が詰まる♡♡

健くんは私の内ももに両手を置いたまま、ゆっくりと腰を動かし始めた♡♡

ぬちゅ♡ ぬちゅっ♡ ぬちゅ、ぬちゅっ♡

馴染んでもいないおまんこを、おちんぽが粘膜をひきずり前後に動く♡♡

ぬちゅ、ぬちゅ、ぬちゅッ、ぬちゅッ♡♡

「……、ッ♡♡ お♡♡ お、っ♡♡ お♡♡♡」

「き、気持ちいい、です、お姉さんのおまんこ…！♡
♡」

ぬぢゅッ！♡♡ ぬぢゅッ！♡♡ ぬぢゅッ！♡♡
ぬぢゅッ！♡♡

健くんの腰のペースが上がっていく♡♡♡
ずり上がりそうになる私の体は、両側から抱えられた
足でなんとか位置を保っていた♡♡

「かなり濡れてきたな♡ でもクリ好きなんだろ？♡♡
弄り続けてやるからな♡♡」
哲也さんが指の腹でクリトリスを押し潰し、こねる♡
♡♡

ちゅくちゅくちゅくちゅくッ♡♡♡ ちゅくちゅくち
ゅく…っ♡♡♡

「お♡ お♡ っ♡ …ッ♡♡ クリ、だめ、っ♡♡
よわいい……♡♡♡」

足の先がビチビチと跳ね、またおまんこが締まった♡
♡

「ちょっと、クリばっかに反応して…！悔しいんですけ
ど！俺頑張ります…！」

ぬぢゅッぬぢゅッ！！♡♡♡ ぬぢゅッぬぢゅッ！♡
♡♡ ぬぢゅッぬぢゅッ！♡♡♡

「お…ッ！♡♡ お、ツツ、おお、……っ♡♡ ちょ、
……ッ♡♡♡」

またおちんぼのペースが上がる♡♡

哲也さんもまるで指紋を感じさせるような圧でクリトリスをこね続けた♡

ぬちゅッぬちゅッ！！♡♡♡ ぬちゅッぬちゅッ！♡♡♡
ぬちゅッぬちゅッ！♡♡♡

ぢゅくぢゅくぢゅくぢゅくぢゅく…っっ！！♡♡♡
ぬちゅッぬちゅッ！！♡♡♡ ぬちゅッぬちゅッ！♡♡♡
ぬちゅッぬちゅッ！♡♡♡

ぢゅくぢゅくぢゅくぢゅくぢゅく……っっ！！♡♡♡
「あッ♡♡ んおおっ♡♡ っ、ツッ♡♡ お、おっっ
！♡♡♡」

目の前で前後する盛り上がった健くんの腹筋♡♡
その下で激しく水音が跳ねる♡♡♡♡
ぬちゅッぬちゅッ！！♡♡♡ ぬちゅッぬちゅッ！♡♡♡
ぬちゅッぬちゅッ！♡♡♡
ぢゅくぢゅくぢゅくぢゅくぢゅく……っっ！！♡♡♡
「おっ、あ、あ——……！♡♡♡ こんな、…っ！！♡♡♡」

強すぎる快感にパニックになりかけっていると、横から翔平さんが私の頭を丸ごと抱えた♡♡

「しっかり気持ちよくなってるね♡♡ オレの番が楽しみだな～♡♡♡」

私の視界は翔平さんの腕で埋まって、隙間から耳やこめかみにキスしてくる♡♡

ぬぢゅッぬぢゅッ！！♡♡♡ ぬぢゅッぬぢゅッ！♡
♡♡ ぬぢゅッぬぢゅッ！♡♡♡
ぢゅくぢゅくぢゅくぢゅくぢゅく……っっ！！♡♡♡
「お、お、おっ、だめ、です♡♡ もう…！♡♡♡」
訴えて、迫り来る絶頂に私は齒を食いしばった♡♡
体がイク準備してる♡♡♡
腰が落ち、足の指が開く♡♡♡

ぬぢゅぬぢゅぬぢゅぬぢゅぬぢゅぬぢゅっっ！！
♡♡♡♡
ぢゅくぢゅくぢゅくっっ！！♡♡♡ ぢゅくぢゅくぢゅくっっ！！♡♡♡

「……おッ、んおおっ、おおおッッ！！♡♡♡♡イクッ
ッ！！♡♡♡♡イク……ッ！！♡♡♡♡♡」

……そこで、哲也さんの手がいきなりクリトリスから
離れた♡♡

「……！！??」

めちゃくちゃにこねくり回されていたクリトリスが解放されたことで、その凶暴とも言える疼きが一気におまんこに流れ込む♡♡

きゅうううう……！！！！♡♡♡♡♡

膣内が奥から急激に狭くなって♡♡♡♡♡
そこを無理やりおちんぽが突くから♡♡♡♡♡

「う、あ……——ッッ！！！！♡♡♡♡♡ きゃあああ
あッッッ！！！！♡♡♡♡♡♡♡♡」

悲鳴のような声をあげて一気に昇り詰めた♡♡♡♡♡
♡

「……っ、やっば！ ちょっと出ちゃいましたあ♡♡♡
♡♡ でもまだですよ、まだ俺イけますから！♡♡♡♡
♡」

急に健くんに足を引き寄せられ体がソファからずり落ちた♡♡

腰が浮いた姿勢のまま、健くんはそこへ自らの腰をぶつけ続ける♡♡♡

……だちゅッ！！♡♡♡
だちゅッ！♡♡ だちゅッ！♡♡ だちゅッ！♡♡
だちゅッ！♡♡ だちゅッ！♡♡

「クリもフル勃起だな♡♡ いまこれいい子いい子♡して
てやったら気持ちいいぞ♡♡♡♡ 爪先で細かく……、
いい子♡いい子♡」

「じゃーあ～♡オレは乳首しててあげるよ♡♡ここもい
い子いい子しててあげる♡♡♡♡」

「おツツ、お、ほおおっ！！♡♡♡♡ そんな、いった、
ばっか、……！！♡♡♡」

力任せのピストンは深く、重くなり♡♡

カリ♡カリ♡カリ♡カリ♡カリ♡カリ♡カリ♡カリ♡

「お、おっおっ！♡♡ やっ、あっ、あああッ！♡♡♡
♡」

いい子いい子なんてレベルじゃない、クリトリスは立
てた爪で鋭く擦られ♡♡

べるっ♡♡ べるるっ、べるるっ、べるるッ♡♡♡
ぢゅ、ぽ♡♡ ぢゅぽおッ♡♡

「ふ、ッおおおお！！♡♡♡♡ おッ、おおおお！♡♡
♡」

乳首も舌を押し付けたまま突起を舐め回される♡♡

だちゅッ！！♡♡♡ だちゅッ！！♡♡♡ だちゅッ
！！♡♡♡ だちゅッ！！♡♡♡ だちゅッ！！♡♡♡
カリカリカリカリカリッ！♡♡♡ カリカリカリカリ
カリッ！♡♡♡

べるるるッ！♡♡♡ べるるるッ！♡♡♡ ぢゅぽぢゅぽぢゅぽぢゅぽ…ッ！！♡♡♡

「お、あ、ああ♡♡♡♡♡ つよい、きもちいいの、つよいいい……ッ！！♡♡♡♡♡」

「そんなに感じてくれて、嬉しい、です…！♡♡ もっともっと味わってください！♡♡♡♡」

だちゅだちゅだちゅだちゅだちゅだちゅッッッッ！！
！！♡♡♡♡♡

だちゅだちゅだちゅだちゅだちゅだちゅッッッッ！！
！！♡♡♡♡♡

「……♡♡♡♡♡♡ お♡♡♡♡♡♡ お、ほ、♡♡♡♡♡」

頭の中、チカチカする♡♡♡♡♡

漏れる声を我慢することもできない♡♡

そんな私を、哲也さんと翔平さんがにやけた顔で見下ろしていた♡♡♡

だちゅだちゅだちゅだちゅだちゅだちゅッッッッ！！
！！♡♡♡♡♡

だちゅだちゅだちゅだちゅだちゅだちゅッッッッ！！

！！♡♡♡♡♡♡

「あ……♡♡♡ あ〜〜〜〜〜〜……！！♡♡♡♡♡
♡ イっちゃう、またイっちゃう……！！！！♡♡♡♡
♡」

「おまんこ締まってきたあ♡♡♡♡ 覚えますから、お
姉さんのイキまんこ♡♡♡♡♡ 今度是一緒にイきまし
ょうね！♡♡♡♡♡」

だちゅだちゅだちゅだちゅだちゅだちゅつつつつ！！
！！♡♡♡♡♡♡

だちゅだちゅだちゅだちゅだちゅだちゅつつつつ！！
！！♡♡♡♡♡♡

だちゅんつつ！！！！♡♡♡♡♡♡

だちゅんつつ！！！！♡♡♡♡♡♡

「イクつつ、イ、……………〜〜〜〜〜〜！！！！♡
♡♡♡♡♡♡♡♡」

「……ふ、っ♡♡ う、……、出てる、射精してる～～
♡♡♡♡♡」

ソファの背もたれに、髪がぐしゃぐしゃになるのも構

わず頭を押し付けていった♡♡♡♡

健くんは目を閉じて出し切るように数度腰を突き出した♡♡

「もういいよね、次オレの番♡♡♡♡♡」

健くんから奪うように私の体を引き寄せたのは翔平さんだ♡♡

翔平さんは私をソファから立たせると背後に立ち、ソファに座っている哲也さんへ私の上半身を押した♡

イってすぐの力の抜けた体は哲也さんに受け止められ、顔だけ振り向くと翔平さんは♡♡

「楽しみすぎてオレのちんぽもこんななんだけど～？♡♡♡ 覚悟してね♡お姉さん♡♡♡」

健くんに負けない、私の手では収まらないような太いちんぽをしごきながら、おまんこに狙いを定めていた♡♡♡

翔平さんが腰を落としそのちんぽでおまんこの入り口を開く♡

斜め上に腰を上げ、ゆっくりと入ってきて♡♡

やはりおまんこはキツイほどに広げられた♡♡♡♡♡

「う、ん…っ♡♡」

「お姉さん、」

哲也さんに呼ばれて顔を戻すと♡

「今度は俺ともキスしてくれるか？」

そう言うから、私は翔平さんのおちんぽを受け止めながら、自分から哲也さんに唇を押し付けた♡♡

……ぱんっ！♡♡♡

その瞬間におちんぽを突き込まれ、唇がズれる♡♡♡
♡♡

ぱんっ♡♡♡ ぱんっ♡♡♡ ぱんっ♡♡♡

「んッ♡♡ あ、♡♡♡あッ♡♡」

体がおちんぽに押し上げられる♡♡

ぱんっ♡♡♡ ぱんっ♡♡♡ ぱんっ♡♡♡

「ふっ、う♡♡ うう♡♡♡」

崩れそうになって必死に哲也さんの首に腕を回ししが
みついた♡

ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡

「…ッ♡♡ っ、っ♡♡ む、っ♡♡ ンあ！♡♡」

さっき健くんがめちゃくちゃに突いていたのとは違う、
翔平さんは探るようにいろんなところを突いて♡♡

ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡
ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡

しばらくそうしたあと、一箇所に集中した♡♡♡♡♡

「……ッッ、お♡♡♡♡♡」

バレてしまった♡♡♡♡♡
気持ちいいところが♡♡♡♡♡

ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡
ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡

「お♡♡ おんッ、ン♡♡ お、お、お、お♡♡♡♡」

「ここでしょ、おねーさんの気持ちいいところ♡♡♡♡」

ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡
ぱんッ♡♡ ぱんッ♡♡

「お、あ♡ あッ♡♡ あ…っ♡♡ お♡♡♡ お、ほ
…っ♡♡♡」

「お姉さんのこと、オレのちんぽで喘がせてると思うと
♡ ちんぽも滾るわあ♡♡♡♡」

奥を突かれるたび、おまんこの奥が熱くて、意識が持
っていかれて♡♡♡

哲也さんにキスしようとしてもできない♡♡♡♡

そう思っていたら哲也さんの大きな手が私の後頭部を
包んで、引き寄せた♡♡♡

唇が捕まる♡♡♡♡

押し付けられ、一気に舌を振り込まれた♡♡♡♡

「あ」後ろで翔平さんの低い声がした♡「しちゃったか
あ、そんでまんこ締まるのもむかつくし」

どちゅんッ！！♡♡♡♡

「…、…っっ！！♡♡♡♡♡♡」

勢いのある突き込み♡♡♡♡

翔平さんが腰を掴んで自分のおちんぼの位置に調整し
たから♡私の足、浮いてしまった♡♡

その体勢で翔平さんは弱いところにおちんぼをぶつけ始
めた♡♡♡♡♡

■ 続きは製品版にて♡